

(国際学会印象記) 第21回 American Society for Histocompatibility and Immunogenetics (ASHI) ミーティングに参加して

丸屋 悦子

京都府赤十字血液センター, 研究部

はじめに

第21回 ASHI は1995年10月6日から11日まで、テキサス州、ダラスで開催された。会場の Anatole Hotel は downtown から車でおよそ20~30分くらい離れたところにある。ひときわそそり立つビルディングと数個の建物からなる大きなホテルで、その最上階からは地平線がみえるほど広い平野にポツポツとビルディングが立ち、その間をハイウェイが走っている様子が眺められる、そんなところである。私はこの学会に初めて参加した。まず私の学会に関する印象記を、次に The ROSE PAYNE 賞を受けられた Dr. Peter Cresswell の講演と特に印象に残った演題について話す。

ASHI 印象記

日本の組織適合性学会と比較して規模の大きさ(ホテル全体が学会場とその宿泊施設)と組織適合性に関する限り、ほとんどすべてを網羅するテーマが扱われる。組織適合性抗原が関与する免疫遺伝学の基礎的研究からその臨床応用にいたるまでが5日間に分配されている。すなわち、大きなテーマごとにほぼ1日が割り当てられ、例えばある日は tolerance について基礎から臨床までの研究発表がなされる。主に Plenary session でその分野の活発な研究者による概論および最新情報について講義され、Abstract presentation でより細部の研究成果が発表される。他方 Workshop でそのテーマの基礎的な解説および現在解明されているところを解りやすく解説する講演がなされる。また Workshop には組織適合性抗原検査法—例えば HLA-class I の DNA typing 法などの検討や、DNA Lab の管理のしかた—DNA コンタミネーションの防止法につい

での指導、組織適合性抗原検査の quality control 法など臨床に应用されている検査技術精度を保つための検討会もある。このように、専門家からビギナーまで幅広く楽しめる学会であると感じた。また、学会での研究成果を次の全体的な進歩に上手に利用している点も印象的であった。例えば、組織適合性抗原の種々の新しい検査法の開発がなされ、それらの検査法により検出される抗原が臨床的に重要である研究成果が得られた場合、参加者により種々の検査法について討論がなされ、最も良い評価をうけた検査法を標準法として決定する。以後この検査については、すべての Lab が決められた方法を行う(もちろん方法が複数ある場合もある)。これは ASHI により認可された方法となり、ASHI が責任をもって QC を行う。ASHI のミーティングでは、この検査法について実施 Lab からの評価と QC の結果から、欠陥がみいだされた場合は改良が加えられより良い方法へと進化させて行く方式がとられている(例えば非血縁間骨髄移植で HLA-class I の allele typing が重要であると結果がでた場合などが良い例)。このように莫大な経費を費やす学会を無駄なく利用するのはアメリカが合理的な社会で、ほとんどが話し合いと契約により成り立っているからであろうか。われわれの組織適合性学会も将来このようなことができるほど、信頼される学会で実際的な一面が持てることを期待する。参加者はもちろんアメリカ人がほとんどであるが、ヨーロッパやオーストラリアの研究者の参加もあり、日本からは6施設、10名ほどの参加者があった。演題数335、10の plenary session があり、各テーマの lecture 総数33、18の Workshop があった。朝8時から夜7時まで Plenary session の lecture と Workshop およ

び abstract presentation, poster session (7日と9日)とびっしり勉強?, 午前, 午後および昼食の3回休憩時間がある。その後, 企業主催の新しい技術のデモンストレーションやユーザーによる使用経験の報告およびそれに関する討論会が催された。日本では経験のない, 連日ハードスケジュールな学会で英語の嵐の中にいたが, そのすばらしさに感激し, 参加できたことに感謝した(早速メンバーに加入してしまった。語学の高い壁があるにもかかわらず)。

ASHI の Award について

ASHI ミーティングでは3種類のAWARDが送られる。THE ROSE PAYNE DISTINGUISHED SCIENTIST AWARD (Peter Cresswell, PhD), Outstanding Technologist Award (Patric W. Adams, MS, CHS) と335のabstractから選ばれる 'ASHI SCHOLARS'(今年Mayo Clinicの2名の研究者 J Baisch, E Zanelli:後に【印象深い演題】の1番目に紹介する, Columbia大学の研究者 A Colovai および Calgary大学の研究者 P Santamariaの4名)である。このうちThe ROSE PAYNE 賞は1985年よりはじめられ, Dr. Rose Payne (HLAの母)は30年にわたりHLA分野に貢献し他の研究者を助け, 知識の共有をいつも心掛けていた人であった。この賞はそのような研究者に与えられるのである(いままでにWalter Bodmer, Jack Strominger, Hugh McDevitt, Paul Terasaki, Bernard Amos, Henry A. Erlich, Johannes J van Rood, Edmond J. Yunis, Peter R. Parham, Bo Dupontらが受賞している)。今年受賞者であるDr. Peter Cresswellはイギリス生まれの研究者でロンドン大学のBiochemistry/ImmunologyでPhD.をとり, HLA class I分子の分離と精製の先駆者の一人である。その後, Dr. Jack StromingerやDr. Bernard Amosなどと仕事をした。彼のおもな研究テーマは抗原提示におけるMHC分子の機能解明, MHCの割れ目にどのようにしてペプチドがはいっているのか? HLA-class IIのinvariant chainの役割, HLA-class IとTAPの関係などについてである。現在Yale大学のImmunologyの教授であり, Howard Hughes Medi-

cal Instituteの研究者である。彼のlectureはいったるところにジョークが入り, 本人もそれを楽しんでいるような明るいドクターであった。

Peter Cresswell: Antigen Processing mechanism

私の研究グループは“ペプチドがどのようにしてMHC分子の溝の中に入り込むのか”に興味をもって研究している。HLA-class IとIIの分子像を眺める(HLA-class IとIIの分子全体を側面からとらえた像)と, HLA-class Iは大きな蛋白(heavy chain)と小さな蛋白(β -microglobulin)が会合し, ペプチドはheavy chainのはじめのふたつのドメインの間に挟まれている。HLA-class IIのペプチド結合状態をみると, HLA-class Iと同様であるが, これに関わるふたつの蛋白分子(α 鎖と β 鎖)はともに膜貫通分子である。この点がHLA-class IとIIでおおきく異なるところである。しかし驚くべきことにこのふたつの分子を膜表面からみた構造(スライドでは上下に α ヘリックスがあり底面が β シートである構造, およびそれを側面から眺めた構造; HLA-A2とDR1をだぶらせて描いている)は驚くほど類似している。ではどのようにしてペプチドがMHC分子の溝の中へ運ばれるのかといった疑問が生まれる。

Class Iの抗原提示

HLA-class Iの場合を図1に示す。Cytosome内の蛋白はProteasome(ふたつのサブユニットからなり, 第6染色体のMHC領域に遺伝子LMP2, LMP7が存在する)によりペプチドに分解される。粗面小胞体上にあるTAP(TAP1, TAP2のサブユニットからなる:遺伝子はMHC領域にある)が小胞体内へATPハイドロシスを使ってペプチドを運搬する。次にHLA-class Iとペプチドがどのようにassembleするかをまとめる。小胞体内で合成されたheavy chainがシャペロンであるcalnexinと物理的にむすばれ, β -microglobulinが近づくことcalnexinとheavy chainは物理的に解離しheavy chainと β -microglobulinが結ばれる。一時的にMHCの溝の中は空の状態があり, つぎにHLA-class I分子は物理的にTAPと結合する。ペプチド

が TAP をかいして MHC 分子の溝にはまる。

Class II の抗原プロセッシングと提示

では HLA-class II の場合を考えてみる。HLA-class II はまるで違った方法で antigen processing が行われる。基本的には図 2 に示すように endoplasmic reticulum (ER) で α , β 鎖と invariant chain (I) が会合し Golgi apparatus をとって trans-Golgi network を介して endosome/lysosome system の early endosome に外来性の蛋白と α , β , I の会合体が集まり lysosome で蛋白はペプチドに分解され, α , β , I の会合体は invariant chain がはずれ, 何らかの方法で α , β 鎖とペプチドの complex ができあがる。そしてその産物は lysosome または trans Golgi から plasma membrane に運ばれると考えられている。invariant chain には 4 つの isoform (p33, p35, p41, p43) が

あり, ER では trimer を形成している。図 3 に ER での α , β , I の会合の様式図を示す。ではどのようにして空の MHC 分子ができ, ペプチドが挿入されるかが問題となる。これを解明するための証拠を与えた mutant cell (T2) がある。この cell (HLA-A2, B5 gene 以外の MHC 領域の遺伝子が欠損している) に DR 遺伝子を挿入し, MHC class II 分子の溝に挟まれているペプチドを調べると, invariant chain の 81 番目~104 番目のアミノ酸からなる 7 種類の長さ異なるペプチドが検出された。それを CLIP (class II associated invariant chain peptide) と名付けた。ではどのように CLIP が MHC class II 分子の溝に入るのだろうか。図 4 (A, B) に示すようなふたつの方法が考えられるが, A であろうと推測している。つぎにこの cell が外来タンパク由来のペプチド (antigenic peptide) をひとつも MHC class II 分子の溝に提示しなかったの

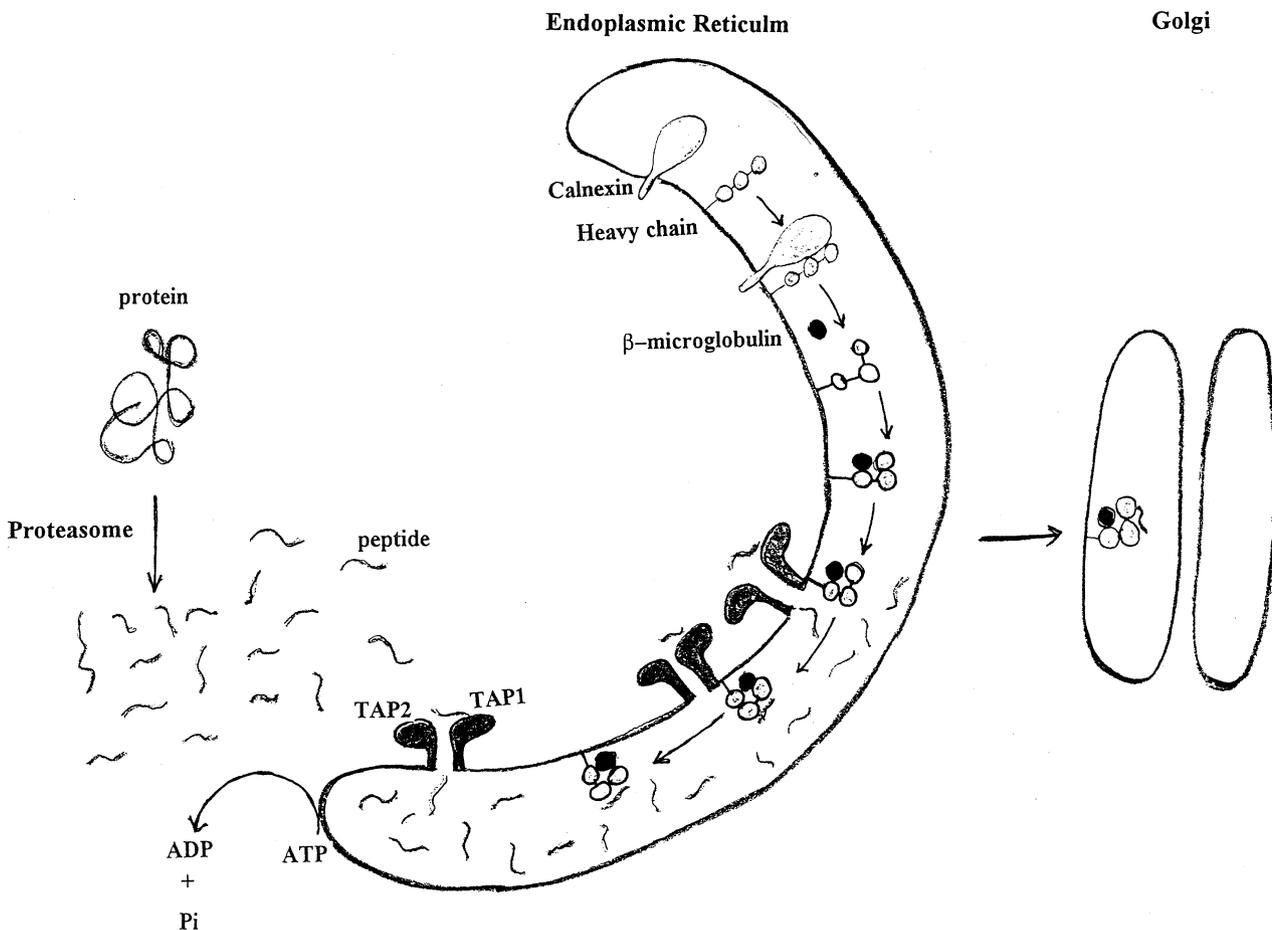


図1 Model of MHC class I peptide loading and transport

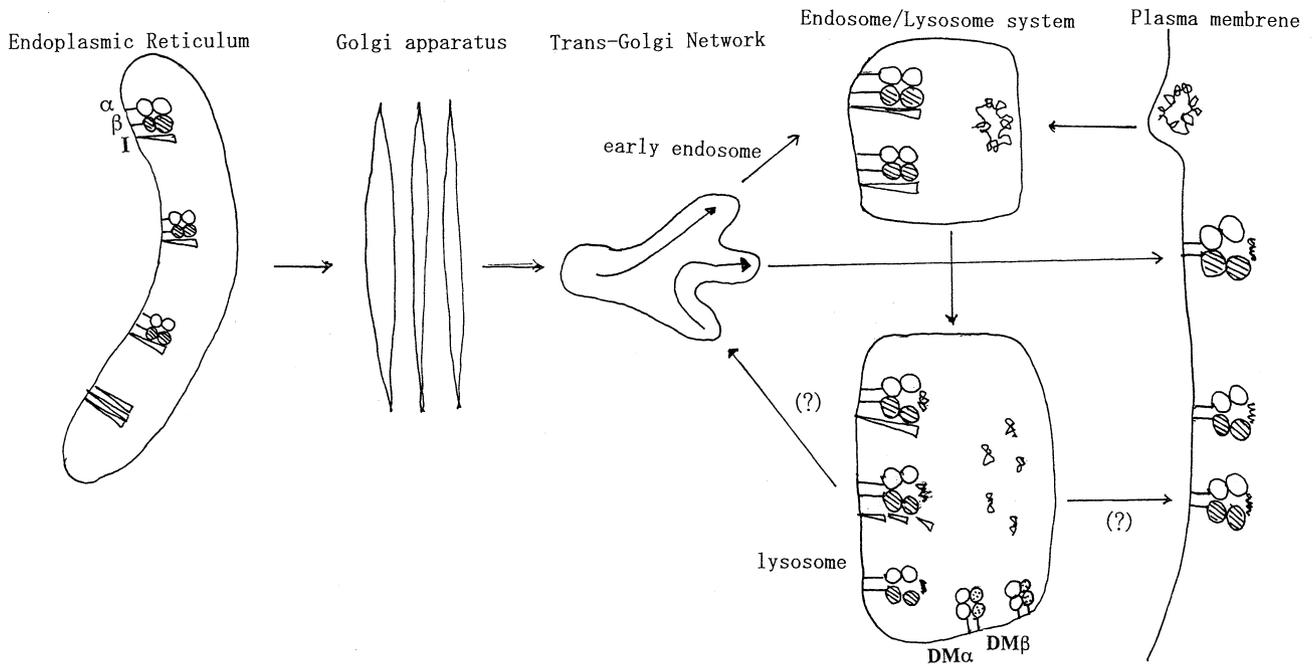


図2 Model of MHC class II transport

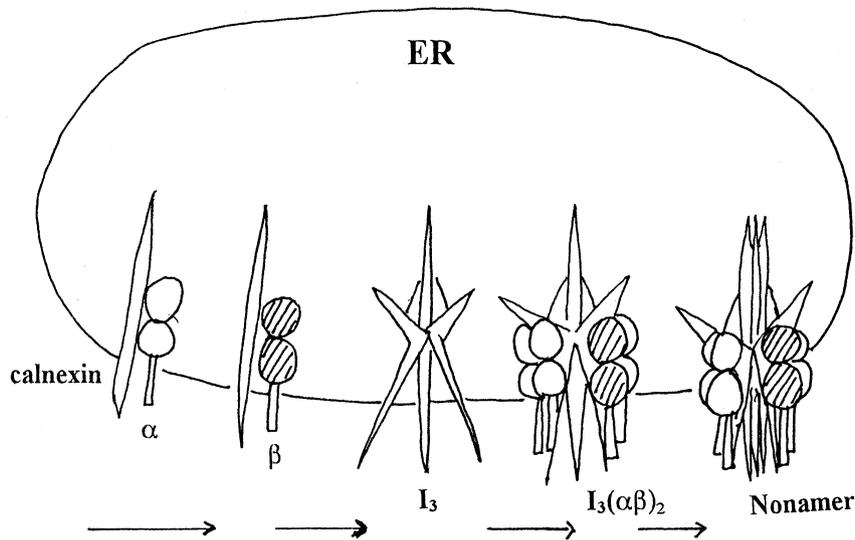


図3 Role of calnexin in the assembly of MHC class II molecules

は、どの遺伝子の欠損によるものであるかが調べられた。そして HLA-DMA と DMB が HLA-class II の antigen presentation に重要な役割を果たしていることが判った。ヒトの DM 遺伝子は J. Trowsdel により発見されている。分子構造は HLA-class II に類似している (ただしまだ不明な点もある)。T2 cell に HLA-DR 遺伝子を挿入した細胞 (T2DR) と T2 cell に HLA-DR, DM 遺伝子を挿入した細胞 (T2DRDM) および正常細胞の

SDS 電気泳動を行った。正常細胞の場合、sample を加熱処理し泳動すると α 鎖と β 鎖のバンドが検出され、非加熱下で泳動すると、αβ dimer のバンドが検出される。T2DR では加熱の有無に関らず α 鎖と β 鎖のバンドと CLIP のバンドが検出され、T2DRDM では正常細胞と同様のバンドが検出された。機能面を調べるため、T2 cell, T2DR cell, T2DRDM cell についてインフルエンザウイルスのペプチド提示能力を T cell の刺激作用により観察し

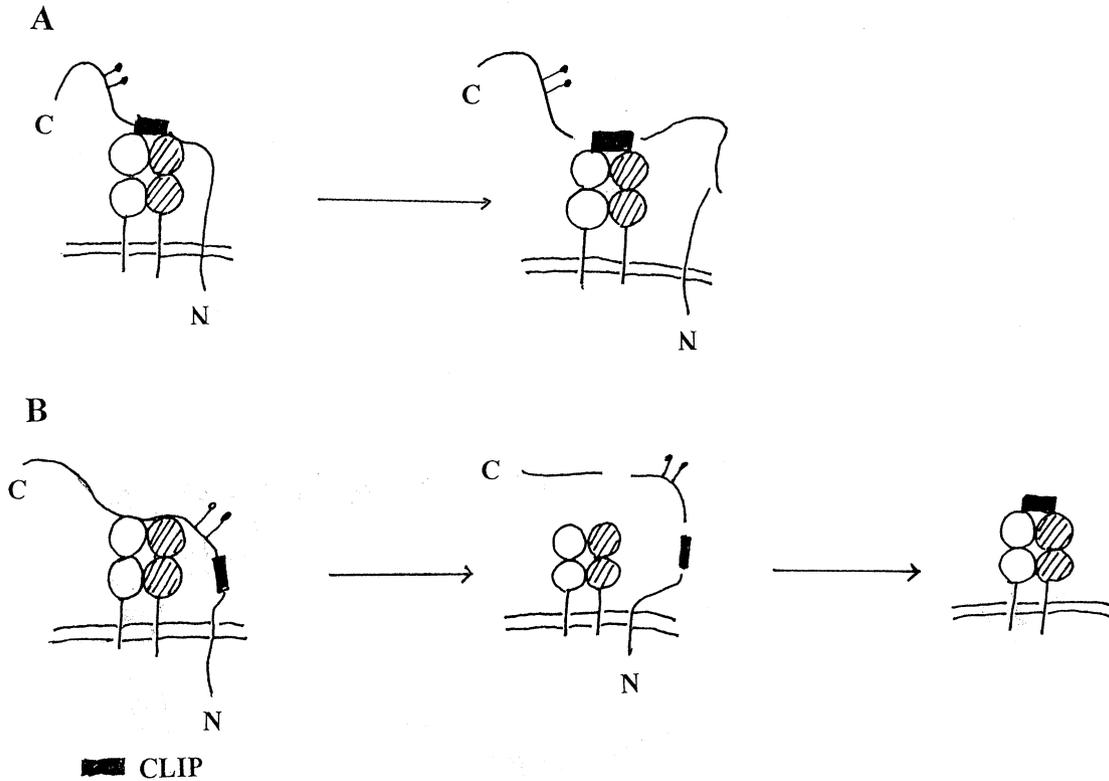


図4 Alternative mechanisms for class II CLIP complex formation

たところ、T2 cell は陰性、T2DR cell が弱く、T2 DRDM cell が強く T cell の刺激作用を示した。また anti-CLIP を用い、各 cell についてフローサイトメトリーを行った結果、T2DR cell は陽性、T2 DRDM は陰性であった。2D analysis で $DM\alpha$ と $DM\beta$ がヘテロダイマーを形成していることが判った。次に lysosome 内でどのようにして MHC class II 分子の溝の CLIP とペプチドが入り代わるのかが問題になる。T2DR cell の HLA-class II 分子を精製し HLA-DM 分子とペプチドを加え HLA-class II 分子を SDS 電気泳動した場合、 $\alpha\beta$ dimer のバンドが検出される HLA-class II 分子 (HLA-class II 分子の溝にペプチドが挟まっている状態) に変えることができるかを調べた。答えは“Yes”であった。primary carboxylic acids 存在下で HLA-DM は T2DR cell の HLA-class II 分子から CLIP を解離し $\alpha\beta$ dimer のバンドが検出される HLA-class II 分子に変えることができた。よって HLA-DM は CLIP を解離しペプチドを結合させる触媒の役割を果たしていることが判った。HLA-

DM の添加量を増加させれば、CLIP の解離量も増加する。では HLA-DM が CLIP と結合することによって空の HLA-class II 分子にペプチドがおさまるのであろうか。しかし HLA-DM と CLIP が結合している証拠は得られていない。また HLA-DM が CLIP を分解しているのであろうか。それは HLA-DR3 から CLIP を抽出した elution pattern と T2DR に HLA-DM を加えた場合の CLIP の elution pattern がほぼ同じであることから否定される。なぜなら、CLIP が HLA-DM により分解されているなら上記ふたつの条件で elution pattern に変化がみられるはずである。HLA-DM の作用は pH 依存性である。例えば T2 に HLA-DR3 を挿入し、pH 5.5 で HLA-DM を作用させた場合一番多く $\alpha\beta$ dimer が作られた。また T2 に DPw4 を挿入した場合、あまり pH 依存性は見られなかった。T2 にマウスの I-A β を挿入した場合は非常に強い pH 依存性を示した。つぎに 7 種の CLIP のうちある種類の CLIP に対するモノクローナル抗体を作成し DM 作用の blocking test を行った。結果は CLIP に対するモノ

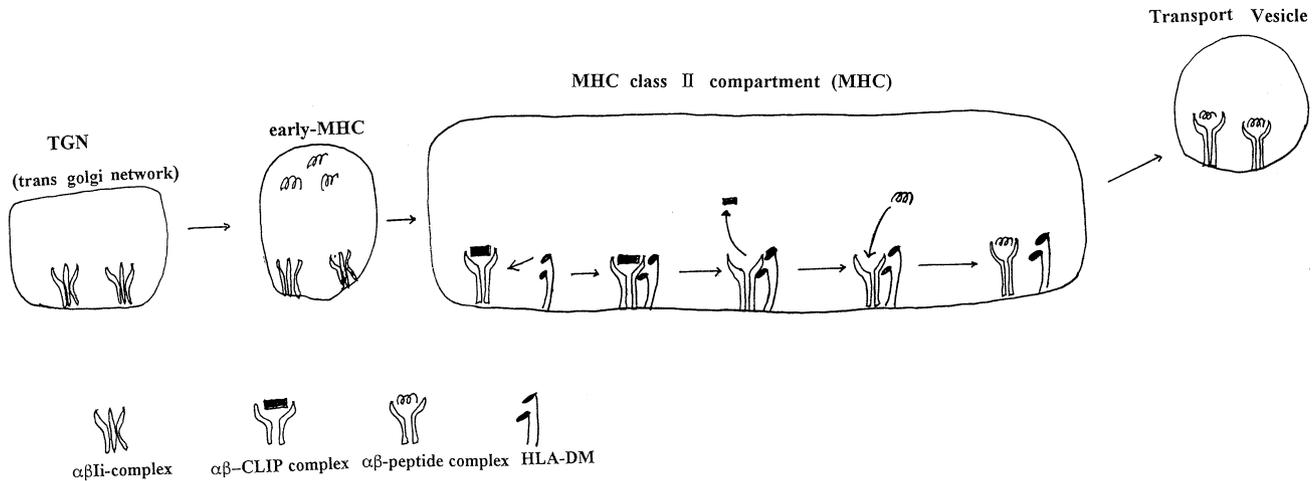


図5 Model of MHC class II peptide loading

クローナル抗体でDMの作用（ペプチド/ $\alpha\beta$ dimerを作成する）をブロックすることができた。このことから HLA-DM と HLA-class II 分子はなんらかの interaction があると考えられる。図5に示すように、HLA-DM は CLIP が挟まった HLA-class II 分子に物理的に interaction し、HLA-class II 分子の conformation を変化させ、CLIP を放出させる。つぎに antigenic peptide が溝に入り HLA-DM は解離する。このように HLA-DM はいっけん酵素のように働く興味深い分子である。

印象深い演題

Polymorphism in HLA - DQ loci determine susceptibility to experimental arthritis in transgenic mice: implications in human RA.

これは Mayo Clinic の Dr. J Baish らの研究発表である。RA の疾患感受性に関与する遺伝子群として HLA - DR genes の hypervariable region 3 とする“shared epitope”の仮説がある。また HLA-DQ genes が関与するという説もある。彼女らは HLA-DR または DQ のうちどちらの遺伝子がヒトの RA 感受性を決めるかを調べた。Class II が欠損したマウスに HLA-DR4/DQ8/Dw4 (RA 発症に関与するといわれている) と DR2/DQ6/Dw12 (RA になりにくいといわれている) から各抗原遺伝子を別々にトランスフェクトしたマウスと、これらの遺伝子をヘテロに導入したマウスを作成した。これらについて collagen を注射し RA を誘導した。結果

HLA-DQ8陽性マウスに強い RA の発症がみられ、陰性群には 1 例の発症も見られなかった。また HLA-DQ6陽性のマウスにも一部発症が見られたが、軽症で慢性化はしなかった。HLA-DQ8/DQ6のマウスは高頻度で RA を発症したが、症状は中程度であった。よって RA の疾患感受性遺伝子は HLA-DQ genes であると考えられると報告した。(ASHI SCHOLARS に選ばれた演題のひとつ)

HLA class I matching and unrelated donor bone marrow transplantation.

これは The Anthony Nolan Research Center の Dr. I Scott らの研究発表である。彼らは unrelated bone marrow transplantation における HLA-class I の適合性の重要度を調べるため、patient-specific donor CTL precursor (CTLp) の頻度を 260 例の patient/potential donor pairs について調べた。結果、HLA-A, B mismatch 群に高頻度に CTLp が検出された ($p=0.01$)。次に HLA-A2 ($n=66$ pairs), B35 ($n=12$), B44 ($n=33$) について allele typing を行い、不適合ペアを検出し、CTLp との相関を調べた。HLA-A2 や B35 の mismatch と high CTLp との相関は見られたが、HLA-B44 において 1 例の例外 (HLA-B*4402 と B*4403) があった。これらの分子に結合するペプチドが類似しているためと考えられる。PCR-SSP で 94 ペアの HLA-C 適合性を調べた結果、不適合が 36% 検出された。また HLA-C 不適合性と high

CTLp との相関はあまりはっきりしないが、移植の結果は一般的に悪かった。よって HLA-C の適合性は重要であることが示唆される。さらに HLA-class I の不適合率は予測されているより多かったと報告されていた。

Locus specific intronic primers for HLA - A, B, and C loci.

これは American Red Cross の Dr. K. Cao らの研究発表である。彼女らは HLA-class I DNA typing に intron の sequence から locus specific な sequence を見つけ、これを primer として PCR-SSOP 法で allele typing を行った。53 の primer pairs (A; 8 pairs, B; 25 pairs, C; 20 pairs) をテストし、最良の primer pair で HLA-A, C allele typing を約120のプロープを用いた報告であった。intron の sequence データは数少ないにもかかわらず primer をデザインし800以上の allele について調べた、その努力に感心した。

Polymorphism of adhesion molecule CD31

and its association with graft vs. host disease (GVHD).

これは Stanford 大学の Dr. S Krishnaswamy らが行った研究発表である。Minor histocompatibility antigens (mHa) が HLA 適合の腎移植で1年後の graft loss が5-10%であることや、HLA identical sib. の bone marrow transplantation (BMT) で20-40%の acute GVHD が起こっていることからその重要性がわかる。彼らは mHa の候補と考えられる vascular endothelial cell (VEC) のアロ抗原のうち CD31 (PECAM-I) の polymorphism について調べた。その多型は codon 125番のアミノ酸 (Leu(Val) に見られ、Caucasian の遺伝子頻度は gf (L)=0.49, gf (V)=0.51であると報告した。また HLA identical sib. の BMT における CD31の適合性と GVHD の発生頻度を調べた結果、不適合群は適合群に比べ5倍以上も多く GVHD を起こしていることを報告した。さらに CD31適合群にも acute GVHD がみられることから additional minor loci の存在を示唆した。

〔国際学会印象記〕 第5回 AOH ミーティング (1995年)

中島 文明¹⁾, 成瀬 妙子²⁾

¹⁾神奈川県赤十字血液センター, 検査課 ²⁾東海大学医学部, 分子生命科学系遺伝情報部門

1995年4月, タイから一通のメールが舞い込んできた。“The 5th Asia and Oceania Histocompatibility” - Prof. Pimol Chiewsilp からである。ASEATTA (Australasian and South East Asian Tissue Typing Association) meeting を兼ねて, バンコックで Workshop, 上海で Conference を開催するので invited speaker として参加を依頼したいという内容であった。突然, なぜ, なにをすればいいのか……疑問だらけであった。ワークショップといっても, AOH としてのワークショップ作業や活動はなにもしていないし, そこへ行ってなにを discussion しようというのだろう。そして, なぜ私のところへ依頼がきたのだろうか。そう言えば, 第4回の AOH もいつの間にかオーストラリアで行われていたことを後から知った。どうやら, ASEATTA で主導権を握っているオーストラリアの仕業なのだろうか?

メールには, プログラムが同封されていた。すでにスケジュールが生まれ, 各セクションには高名な先生方の氏名が配されている。アジア・オセアニア地域以外にも, P. Terasaki や E. Albert の名前が見える。これは事後承諾ということなのか。私の名前は2日目の“Workshop VI: Expression & Serology II”のところにあった。Co-ordinator: J. Williamson, これでいままでの疑問が解消した。彼は, 12th International Histocompatibility Workshop の AHS (Allele and Haplotype Society) #6 で chairman を務める男であり, 私はそこに参画しているのである。後になって J. Williamson から FAX が届き, やはり 12th Workshop の preliminary report を AOH meeting でやってほしいという内容であった。

この meeting は 12th Workshop の preliminary report を骨格として, 最近のトピックや free communication を織り込んで展開していくというスタイルをとった。かくして, AOH & ASEATTA meeting は1995年12月10日から4日間, バンコックのインペリアル・ホテルで開催された。この時点で上海の Conference は中止 (消失?) になっていた。

12月9日午後4時, バンコックのドン・ムアン空港に降り立った。時差は2時間で体調にほとんど影響なく, 気候も思ったより暑くはない。ただ, 街中に独特の匂いがしている。会場には何席ぐらい用意されていたのだろうか, さほど多いとは感じなかった。日本の組織適合性学会程度と申し上げておく。

12th Workshop の pre-report といっても, たとえば AHS では, すべての AHS セクションからの報告があったわけではない。報告があったのは, AHS #3 (A10, A19), AHS #4 (B5, B23, B18), AHS #5 (B7, B27, B22, B42, B47, B703, B73), AHS #6 (B8, B14, B16, B62, B59), AHS #8 (B15, B17, B46, B70) といったところである。名 Society では血清学のデータをベースとして, polymorphism の検討を行った結果 new allele の発見に至ったといった過程が多くみられた。私は AHS #6 での報告であったが, 内容は日本人に認められる HLA-B39N の解析であり, これも前述のことと同じ経緯をとっている。こういった報告の会間に, これらと関連したトピックが織り込まれている。AHS としての報告ではなかったが, Dr. Chandanayingyong は HLA-A2 の遺伝子型と血清学的多型について比較して, そこで使用された遺伝子データが, 昨年の中央血液センター管内のワークショップで私がタイプしたものであったことは非常に喜びであった (Dr. Chandanayingyong

は我々のこのワークショップに参加してサンプルを提供していた)。また、E. Albert は promotor polymorphism について、J. Williamson は HLA-B 分子の発現制御についてといった具合である。

AHS 以外にも、Disease, Anthropology, Soluble HLA antigen や方法論として SBT や, INNO-LIPA の紹介と、12th Workshop の前哨戦として盛り上がりを見せていた。



さて、タイという国について。ラマ王朝のこの国の首都バンコックは大都会である。街中には、そごうや伊勢丹、ケンタッキーフライドチキンやマクドナルド、セブンイレブンまである。ただし、おでんやおにぎりは売っていない。走っている車の8割方は日本製。タクシーは3種類ある。まず、“TAXI METER”と書かれた普通のタクシー。しかし、乗るとメーターがついてなく、運転手と交渉することになる。次が、トゥクトゥクと呼ばれている3輪タクシー(例のミゼットである)。そして、バイクタクシー。これは、ひとりしか乗れない。また、ノラ犬が非常に多い。彼ら?は全くのんびりしていて、踏ん付けでもしない限りヒトに危害を加えることはない。要するに、一年中気候のよいこの街で餌に困らなく住みやすい環境なのである。物価は安く日本の3分の1程度で、日本人にとっても住みやすい環境である。

タイの人は普通タイ語を話す。しかし、かれらは我々を見ると日本語で話しかけてくる。我々が、例えば韓国人をみてもほとんど区別できないのに、どうして彼らには判るのだろうか。そういえば、日本人はアジアの顔をした欧米人であるという悪口をど

こかで聴いた。この、タイ語には日本語と同じく、いわゆる女言葉と男言葉があり、男性と女性とで言葉尻が異なっている。人々は時間に振り回されることなく、ゆったりと自分のリズムで生活しているといった印象を受けた。

首都バンコックを離れると、数々の遺跡やリゾート地がある。写真は釈迦の涅槃像。なんと全長45mある。戦火によりところどころ変色しているが紺碧の空に映えるその表情は我々にやすらぎを与えてくれる。(中島文明)

第5回のAOHミーティングは、去る1995年12月10日から13日までの日程でタイの首都バンコックにて開催された。

12月9日、車で早朝に自宅を出発したにもかかわらず、ひどい渋滞に巻き込まれ出発時刻の45分前に成田に到着し、機内まで走りまくって搭乗。やさしい猪子先生は2時間近くカウンターで待っていてくれた。そしてバンコックに到着。バゲージクレームでうろうろしていると、今回の開催者である Prof. P. Chewsilp (Mahidol Univ., Bangkok) 研究室の Dr. K. Sujirachato が出迎えてくれた。彼女は以前、東海大学の辻公美先生の教室に留学していたこともあり、久々の再会で、この後我々より1つ後の便でバンコック入りした辻先生と徳永勝士先生と共にホテルまで送り届けてくれた。

会場となったインペリアルホテルは、ガーデンプールを備えた近代的で美しい中でも東洋的な雰囲気のあるホテルだった。会場のテーブルやスクリーン、マイクなどが豪華な蘭の花で彩られて、明るく華やかな空気の中でディスカッションが行われた。タイは12月がベストシーズンと言うこともあり、アジア、オセアニア諸国は勿論のこと、ヨーロッパやアメリカなどからも HLA おたくが集った今回のミーティングは、4つのシンポジウム、11のワークショップと一般演題の、大きく3部から構成されていた。主な内容は、血清学、DNA タイピング法とその応用を中心に、移植、疾患感受性、一般集団解析、遺伝子構造などであったが、この会議の性格上、テクニカルな報告は欧米や日本からがほとんどで、アジア諸国からはハプロタイプや抗原遺伝子の多型性

に関する演題が多かった。この中でも大活躍だったのは徳永先生で、ミーティング2日目の午前中にシンポジウムと2つのワークショップで発表され、さらに座長までこなすという忙しさだった。ワークショップでは徳永先生を中心に、クラスIIのDNAタイピング法について、INNO-LIPA法を佐田正晴先生が、TMA-HPA法を松原亨一氏が、SBT法を筆者が紹介させて頂いた。これらの新しい方法やクラスI DNAタイピングについてはアジアではまだ導入されていないところが多く、これを機にどんどん利用していただきたいところである。血清学での報告は、本年6月にフランスで開催される第12回の国際HLA会議(12th IHWS)で分担が割り当てられた各グループからの報告が主で、いくつかの地域や人種ではクラスIの中で特にA抗原について遺伝子解析が進んでいるようだったが、抗血清との対応はまだ十分ではないようだった。日本からは中島文明氏がB39抗原について発表を行っていた。

疾患関係では、辻先生が胃癌患者とHLA、TNF遺伝子の相関についての講演をされ、その他IDDMや橋本病などについての解析の報告があった。骨髄移植や腎移植については、適合度の違いによる予後への影響や各国の現状報告が多かった。いずれの報告も地域により進行状況に差があり、情報やテクニカルサポートなどの活発な意見交換が必要ではないかと思われた。また最近の情報として、HLA領域に存在する新たな非HLA遺伝子の解析やその意義についてのワークショップも行われ、日本からは当学会誌の編集長でもある猪子先生が報告を行っていた。

さて、ミーティング最終日の前夜、カンファレンスディナーが催され、タイ料理を頂きながら、民族楽器による演奏と舞踊を楽しみ、ひとときを過ごした。アトラクションの後、今回の開催者であるProf. Chewsilpをはじめとするいくつかのグループが、今回のミーティングでの様々な労をねぎらわれて表彰を受けた(写真1)。拍手のうちにディナーが終了



した……と思ったので会場を後にしたところ、オーストラリアのドン、Dr. Dawkinsが追いかけてきて、連れ戻されると、かたづけの始まった舞台では大勢の参加者がクリスマスソングでHLAのかえ歌を合唱していた。訳の解らないままに徳永先生、猪子先生、そして筆者までが舞台上に上がられ、合唱に参加してしまう。さらにこれで終わりかと思ったら3人で何か歌えという命が下り、にわかにアカペラトリオを結成し、リクエストにお答えして“sukiyaki”をご披露してしまった。こうして思い出深いディナーが終了し、その後は皆、夜のバンコクで数々の思い出作りに励んだが、格調高い当学会誌ではお伝えできないのが残念である。

翌日、好評の内にこのミーティングも幕を閉じたが、その前にまずAOHの提唱者でもある辻先生が、これまでのご尽力と功績を讃えられ、AOHのプレジデントとして就任されること、また、次回の開催者にはインドのDr. NK Mehraが決定し、1998年にニューデリーで開催されるということが報告された。今回のミーティングに当たっては、企画が二転三転し、開催が危ぶまれたようだったが、たくさんの方々のHLAへの熱意により実現したことと思う。そして今後も日本がアジアのリーダーシップを取るための必要性を痛感した4日間であった。

(成瀬妙子)